

第8節 技術・家庭（家庭分野）

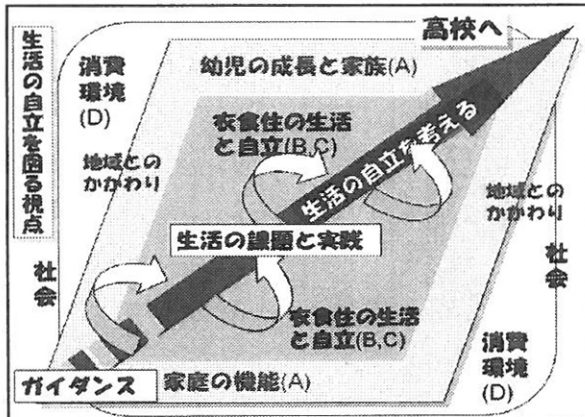
1 改訂のポイント

(1) 改善の基本方針

- 社会において子どもたちが自立的に生きる基礎を培うことを重視
- 小学校、中学校の学習の体系化による基礎・基本の重視
- 社会の変化への対応
- 実践的・体験的な活動と問題解決的な学習活動の充実
- 実践的態度をはぐくむ教育の充実

(2) 改訂の要点〔家庭分野〕

- ア 内容構成（4つの内容）
- A 家族・家庭と子どもの成長
 - B 食生活と自立
 - C 衣生活・住生活と自立
 - D 身近な消費生活と環境
- イ 履修方法
- ・ AからDの4つの内容をすべての生徒に履修させる。ただし、「生活の課題と実践」に関する指導事項は、選択して履修させる。
 - ・ ガイダンス的な内容を第1学年の家庭分野の最初に履修させる。
- ウ 社会の変化への対応
- ・ 少子高齢化、食育の推進、持続可能な社会の構築などの社会の変化に対応する視点から改善を図った。
- エ 言語を豊かにし、論理的思考や生活の課題を解決する能力をはぐくむ視点の充実



中学校技術・家庭科家庭分野の構造(イメージ図)

(3) 目標

ア 教科の目標

生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。

教科の目標は、技術・家庭科の果たすべき役割やねらいについて総括して示しており、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を目指して、生徒が生活を自立して営めるようにするとともに、自分なりの工夫を生かして生活を営むことや、学習した事柄を進んで生活の場で活用する能力や態度を育成することをねらいとしている。

イ 家庭分野の目標

衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

家庭分野の目標は、生徒の生活の基盤となる家庭や家族の機能を理解し、衣食住などの生活にかかわる基礎的・基本的な知識及び技術を習得することによって、生活の自立を目指し、家庭生活をよりよく豊かに創造しようとする能力と態度を育成することをねらいとしている。

2 指導計画作成上の留意点

(1) 指導計画の作成

- 3 学年間を見通した全体的な指導計画
 - ・ 授業時数については、3 学年間を見通した全体的な指導計画に基づき、いずれかの分野に偏ることなく配当して履修させる。
 - ・ 各分野の内容 A から D は、すべての生徒に履修させ、「生活の課題と実践」の事項については、3 事項のうち 1 又は 2 事項を選択して履修させる。
 - ・ 「A 家族・家庭と子どもの成長」の(1)については 3 学年間の学習の見通しを立てさせるガイダンス的な内容として、第 1 学年の家庭分野の最初に履修させる。
- 各項目*に配当する授業時数及び履修学年
 - * 「(1), (2), (3)」を指す
 - ・ 指導内容や地域、学校及び生徒の実態等に応じて各学校において適切に定める。
- 題材の設定
 - ・ 各項目、各事項*については、相互に有機的な関連を図り、系統的及び総合的に展開されるよう適切な題材を設定して計画を作成する。 * 「ア, イ, ウ, エ」を指す
 - ・ 小学校における学習や他教科等との関連を図る。生徒の発達の段階に応じ主体的な学習活動や個性を生かす。生徒の日常生活とのかかわりや社会とのつながりを重視する。
- 道徳の時間などとの関連
 - ・ 道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、技術・家庭科の特質に応じて適切な指導をする。年間指導計画の作成などに際して、道徳教育の全体計画との関連、指導の内容及び時期等に配慮し、相互に効果を高めあうようにする。

(2) 各分野の内容の取扱いにおける配慮事項

- 実践的・体験的な学習活動の充実
 - ・ 直接体験することにより、具体的に考えよりよい行動の仕方を身に付けるとともに、知識及び技術の習得、基本的な概念の理解などを確かなものにする。
 - ・ 失敗や困難を乗り越えやり遂げたという成成感、自分への自信につながり、学習意欲を向上させる。
- 問題解決的な学習の充実
 - ・ 問題解決能力（思考力、判断力、表現力等）の育成のために、生徒自らが課題を発見し、習得した知識及び技術を活用し意欲をもって追究し、解決のための方策を探るなどの学習を繰り返すことが大切である。
- 家庭や地域社会との連携
 - ・ 家庭や地域社会における身近な課題を取り上げて学習したり、学習した知識と技術を実際の生活で生かす場面を工夫したりするなど、生活に活用できるような指導が求められる。
- 学習指導と評価
 - ・ 基礎的・基本的な内容の確実な定着と個性を生かす教育の充実という視点から学習指導の改善を図る。
 - ・ 指導計画の立案の段階から評価計画を組み込み、評価を学習指導に生かすようにする。

(3) 実習の指導

- 施設・設備の安全管理に配慮し、学習環境を整備するとともに、火気、用具、材料などの取扱いに注意して事故防止の指導を徹底し、安全と衛生に十分留意する。
- ・ 安全管理（教師が管理する）①実習室等の環境の整備と管理 ②材料や用具の管理
- ・ 安全指導（生徒に指導する）①実習室の使用等 ②学習時の服装 ③校外での学習

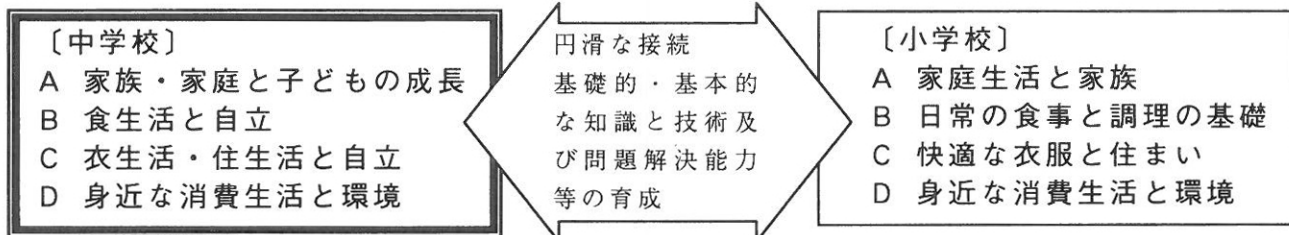
(4) 言語活動の充実

○衣食住やものづくりなどに関する実習等の結果を整理し考察する学習活動や、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりするなどの学習活動が充実するよう配慮する。

(学習活動例)

- ・実習等の結果を整理し考察する。
- ・生活における課題を解決するために献立表などの図表を用いて考え、説明する。

(5) 家庭分野の内容の取扱い



A 家族・家庭と子どもの成長

(1)自分の成長と家族 (2)家庭と家族関係 (3)幼児の生活と家族

ア (1)(2)(3)については、相互に関連を図り、実習や観察、ロールプレイングなどの学習活動を中心とする。

イ (2)高齢者などの地域の人々とのかかわりについても触れる。

ウ (3)幼児期における周囲との基本的な信頼関係や生活習慣の形成の重要性についても扱う。また、幼稚園や保育所等の幼児との触れ合いができるよう留意する。

B 食生活と自立

(1)中学生の食生活と栄養 (2)日常食の献立と食品の選び方

(3)日常食の調理と地域の食文化

ア (1)水の働きや食物繊維についても触れる。

イ (2)主として調理実習で用いる生鮮食品と加工食品の良否や表示を扱う。

ウ (3)魚、肉、野菜を中心として扱い、基礎的な題材を取り上げる。地域の食文化については、調理実習を中心とし、主として地域又は季節の食材を利用することの意義について扱う。また、地域の伝統的な行事食や郷土料理を扱うこともできる。

エ 食に関する指導については、技術・家庭科の特質に応じて、食育の充実に資するよう配慮する。

C 衣生活・住生活と自立

(1)衣服の選択と手入れ (2)住居の機能と住まい方 (3)衣生活、住生活などの生活の工夫

ア (1)和服の基本的な着装を扱うこともできる。衣服の計画的な活用や選択は、既製の表示と選択に当たっての留意事項を扱う。日常着の手入れは主として洗濯と補修を扱う。

イ (2)簡単な図(平面図ではなく、^{ちようかんず}鳥瞰図)などによる住空間の構想を扱う。

ウ (3)(1)との関連を図り、主として補修の技術を生かしてできる製作品を扱う。

D 身近な消費生活と環境

(1)家庭生活と消費 (2)家庭生活と環境

ア 内容 A, B, C の学習との関連を図り、実践的に学習できるようにする。

イ (1)中学生の身近な消費行動と関連させて扱う。

3 Q & A

Q 1 年間指導計画作成に向けて、どのようなことに配慮したらよいですか。

目標の実現を目指して、これからの生活を展望し生活をよりよくしようとする能力と態度を養うために、内容のA, B, C, Dを単独で区切るのではなく、相互に有機的な関連を図り、総合的に展開されるようストーリー性のある3学年間を見通した計画を立てることが大切です。また、AからDの各項目については、地域や学校及び生徒の実態等を十分考慮し、適切な時期に分散させたり、特定の時期に集中したり、3学年間を通して履修させたりなどを工夫し計画的な履修ができるよう配慮します。

Q 2 「A(1)ア 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」をどのように扱ったらよいですか。

A(1)アは、大きく2つの扱いになります。

1つ目は、ガイダンスの扱いです。家庭分野の学習の導入として、小学校家庭科の学習を踏まえて、中学校3学年間の学習の見通しを立てさせるために、第1学年の家庭分野の最初に扱います。

2つ目は、A(2)や(3)との関連を図り学習を進める扱いです。A(2)又は(3)の導入として、自分の成長や生活は、家族やそれにかかわる人々に支えられてきたことに気付くようにします。

Q 3 「A(3)ウ 幼児との触れ合い、かかわり方の工夫」が必修となりましたが、幼児と触れ合う直接的な体験が難しい場合はどうしたらよいですか。

地域の実態に応じて、子育て支援センターや育児サークルの親子との触れ合いや、教室に幼児を招いての触れ合いを工夫するなど、可能な限り直接的な体験ができるよう留意することが大切です。しかし、どうしても困難な場合には、視聴覚教材を活用したり、生徒の幼児期の遊びを取り上げ、ロールプレイングなどを行ったりして工夫しましょう。

Q 4 「C(3)ア 布を用いた物の製作」は小学校との違いをどのようにとらえ、どのような物を製作したらよいですか。

ここでは、身近な衣服の材料である布を用いた簡単な衣服や小物を製作することを通して衣生活や住生活を豊かにするための工夫ができるようにすることをねらいとしています。

日常着の手入れとの関連を図り、補修の技術(まつり縫いなど)を生かしたり、小学校で学んだ手縫いやミシンの基礎的・基本的な知識と技能を発展させたりして、完成後に活用することにより自分や家族の生活がより豊かになるような物を扱います。生徒が製作の目的を明確にもてるよう、また、生徒の個性や工夫が生かせるように配慮することが大切です。

Q 5 選択して履修させるA(3)エ、B(3)ウ、C(3)イの「生活の課題と実践」は、具体的にどのように計画し評価したらよいですか。

「生活の課題と実践」は、生活の中から生徒が課題を見付け、計画を立て、実践し、評価、改善を行うという一連の問題解決的な学習を大切にしています。生徒の主体性を尊重し、3学年間を見通した全体的な指導計画を作成する中で、生徒が学習する事項を選択できるようにすることが望ましいとされています。履修の時期については、学期中のある時期に集中させて実施したり、特定の時間を設けて継続的に実施したり、長期休業を活用して実施したりするなどの方法が考えられます。また、評価については、家庭や地域社会において実践した結果の良し悪しでなく、ねらいに即してあくまでも学校での学習活動を中心に評価します。